2024 年 4 月 10 日
日本建築学会近畿支部　「現代都市ローカリティ」部会
代表　清山　陽平

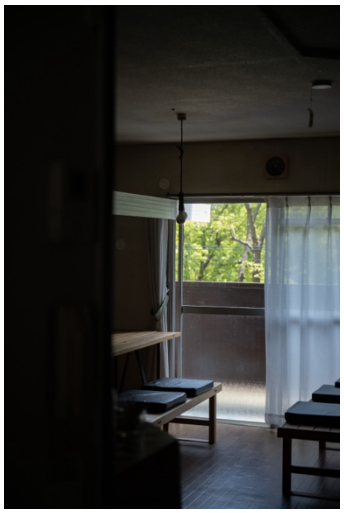
若手研究部会　活動成果報告書

インディペンデントキュレーター池田佳穂が企画した展覧会「オープンパーク MINE：ストリート／どう遊ぶ？」に、アーティストの Aokid とともに参加した。清山は出展者として、会場であるアーティスト共同スタジオ山中 suplex の別棟「MINE」（大阪市西区新町峯ビル）の地歴を示す展示パネル兼インスタレーションを作成した。戦災復興土地区画整理後の土地に建つ 1979 年竣工 ALC 造ビルに地域性を見出す点に挑戦があっただけでなく、ダンスを起点に活動を行うアーティストとの共同として、そうした地域性を来場者らが、現地にて鑑賞する身体を手がかりに理解していくことを意図した展示として発表し、様々にフィードバックを得た点に本活動の大きな成果があった。すなわち、現代風景に現れる微かな地域性を、風景を体験する身体によって発見・共有することの有用性を一定確認できた。作品の詳細は以下である。

（　展覧会の参考 URL ：　https://paperc.info/event/25403　）

《プラスティックボード—大阪新町峯ビル》

土地や建物のもつ来歴への認識を、現在の風景や空間を経験する身体の動きに重ねることを意図したインスタレーション。当地は 16 世紀末の郊外、大坂城建設時の資材置き場（砂場）であり、後の新町遊郭の南西端、近代には都心近傍の商工業・一般住宅地へと遷移する中で、労働、行楽、遊興、売買、居住などの混在を引き受け続けた。これら来歴が焦土と化した後、戦災復興土地区画整理により形成された街区の内側、小公園横に建つのが会場の峯ビルである。各所開口からの光や風を拾う半透明のボードは、２枚背中合わせにした波板（ポリカーボネート）に不織布（ポリプロピレン）を巻きつけ、洗濯糊（ポリビニルアルコール）を塗り重ねることで制作。9 尺という住居にはオーバーな長さに沿って振り返る、覗き込む、眺望するといった視線の動きの先、何気ない現在の風景、空間、地物に重ねて、多くが眼前から失われてしまったその来歴を示唆するテキストや図を微かに浮かべる。



展示風景の様子（撮影：山月智浩）